

総説

日本人看護学生の日本語力に関する文献検討
**A Literature Review on the Japanese Language Skills
of Japanese Nursing Students**

鈴木明美¹⁾， 水野千奈津¹⁾， 石綿啓子²⁾
Akemi Suzuki ， Chinatsu Mizuno ， Keiko Ishiwata

1) 大東文化大学 スポーツ・健康科学部 看護学科

2) 日本医療科学大学 保健医療学部 看護学科

1) Daito Bunka University,

Faculty of Sports & Health Science, Department of Nursing

2) Nihon Institute of Medical Science University,

Faculty of Health science, Department of Nursing

抄 録

日本語を母語とする看護学生における日本語力の研究について、動向を明らかにすることを目的に、医学中央雑誌（Web版）とCiNiiから、年代・論文の種類は指定せず、「看護学生」「日本語力」をキーワードとして文献検索を行った。「日本語力」については、同意味を示す「国語力」と日本語力の構成要素と考えられる日本語能力テストによって測定される項目群を参考に、「作文力」「対話力」「語彙力」「読解力」「聴解力」を追加して検索した。総文献10件から目的に沿った文献9件を抽出し分析対象とした。

分析は、看護学生の日本語力の現状および向上に向けての取り組みに分けて行った。その結果、日本語力の現状に関するものが5件、向上に向けての取り組みに関するものが4件であった。看護学生の日本語力に関する報告は、限られた報告ではあるが他の分野と同様に日本語力の低下が指摘されていた。またこの対策としては、入学前教育、初年次教育として日本語に関する講義やeラーニングが有効であった。

キーワード：看護学生，看護職，日本語力，文献検討

Keywords: Nursing Students, Nursing profession,
Japanese language skills, literature review

I 緒言

言語が果たす意義は様々である。我々の日常生活では、言語は人々のコミュニケーションを担い、一人一人の自我の意識を支える大きな役割をもつ。文部科学省¹⁾は、言語の果たす役割には「創造的思考(とそれを支える論理的思考)の側面」「感性・情緒の側面」「他者とのコミュニケーションの側面」があると述べており、正にこれを示すものとする。言語は、身近な人との関わりや生活の中で獲得され、発達段階に応じた適切な環境の中で、思考・判断・表現され、他者と関わる手段ともなり、洗練されていく。つまり言語は、人の生涯にわたる生活の中で、極めて重要な役割を果たしている。池田²⁾は、「言語は意識の現実型」であるとし、日常生活において言語となって発現される源泉には、必ず人間の意識の形成があると述べている。岡部³⁾は、病む人を対象とする看護職にコミュニケーションを教えるための科目の重要性を報告しているように、看護にとってのコミュニケーションは、患者－看護師関係の構築、診療の補助や援助の過程において欠かせないものである。本研究では、言語力は、看護に欠かせないコミュニケーションの重要な位置を占めると考えた。

このような役割を果たす言語が、わが国にとっては「日本語」であることは言うまでもない。日本には法令による公用語の規定はないが、各種法令において日本語を用いることが規定されている。また、学校教育においては「国語」として学習を課されるなど、日本語は、事実上唯一の公用語となっている⁴⁾。英語が実質的に、世界の共通語として情報交流を担う機能を果たしつつある中、母語尊重意識の高まりや、少数言語を保護する政策の実施など、個々の言語を大切にしようとする考えに立った動きもある。今後の国際的なコミュニケーションにおいて、日本語が有力な言語の一つとして一定の役割を果たすことが期待されていると言える。このようなことから、文化庁⁵⁾は、近年の国際社会における日本語に対する需要や期待も従来とは異なったものになりつつあ

り、今後は、母語としての日本語を大切にし、視野を世界に広げ、国際社会の動向や世界の言語状況を踏まえつつ、日本語の在り方を考えていく必要があると述べている。

一方、日本語を母語とする日本人の日本語力低下が指摘されている事実もある^{6~16)}。高等教育機関である大学においても問題となっており、専門科目の学習と並んで、日本人学生のための日本語の授業を行う大学が増えている^{7, 8, 12, 16)}。

日本語力の充実は、思考力を高め、論理的に考え、発想する力を養うことにつながる重要な課題であるという¹⁷⁾。日本で学ぶ学生にとって日本語力は、すべての学問の根底に位置するものである。

これらのことから、人を対象とする看護師を目指す看護学生にとっても、日本語の力は重要な能力と考える。そこで本研究は、日本人看護学生における日本語力の研究の動向を文献研究により明らかにすることを目的とした。

II 研究目的

看護学生における日本語力研究の動向について文献検討により明らかにする。

III 文献レビューの方法

1. 日本語力の概念的定義

本研究で、検討する概念を以下のように定義した。「国語力」「作文力」「対話力」「語彙力」には、広辞苑第7版を参考にした。

1) 日本語力

小野ら¹⁸⁾の言う「初等・中等教育での国語教育の上に、高等教育でのさまざまな学びや社会人として必要となる理解力、論理力、論述力などの思考力、さらに自分の人生を組み立てるための創造力や問題解決力などを支えるための力」とした。

2) 国語力

日本にとって公的なものとされており，別称でもある日本語を使用する力

3) 作文力

文章を作成し，書き表す力

4) 対話力

相手とのコミュニケーションをはかり，正しく伝えることができる力

5) 語彙力

一つの言語について語彙（言葉・単語）をどれだけ知っているかどうかの力

6) 読解力

PISA(Programme for International Student Assessment) 型「読解力」の定義¹⁹⁾を採用し，「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，テキストを理解し，利用し，熟考する能力」とした。

7) 聴解力

Rost, M²⁰⁾によれば，聴解力には，音の識別，語の認識，文法的まとまりの認識，談話的なまとまりである表現と発話の認識，言語要素とイントネーション・ストレス・ジェスチャーなどの関連付け，背景知識とコンテキストの使用，重要な単語の意味の想起という7つの構成要素があると言う。これをふまえ，本研究では「音や語を認識し知覚するスキル，文法的なまとまりの認識のような分析スキル，言語要素やイントネーション・背景知識・単語の意味想起などを統合した能動的に話し手のメッセージを再構築する力」とした。

2. 文献選定の条件

本研究では，文献選定のため，文献の研究年，研究テーマ，研究方法に関して以下のような条件を設定した。

近年指摘されている日本人の日本語力低下について推移もみるため，文献の研究年には制限を設けず検索を行った。

概念定義に示したように「日本語力」と同等の意味を示すものとして「国語力」を検討した。これら2つのキーワードである「日本語力」と「国語力」は，

言語の能力についていくつかの要素を複合的に含むと考えた。そこで、文部科学省の言う「これからの時代に求められる国語力」²¹⁾を参考に具体的な諸能力として、「聞く力・話す力・読む力・書く力」があげられ、日本語能力テストによって測定される項目群双方を参考に、「作文力」「対話力」「語彙力」「読解力」「聴解力」を追加項目として、それぞれ看護との間で検索を行うこととした。

本研究では、日本語を母語すなわち「幼児期に母親などから自然な状態で修得する言語・第一言語」²²⁾とする人達を対象とした文献とした。

文献の選定基準は、以下の通りである。

1) 文献選定基準

- ①看護学生を対象とした研究である。
- ②日本語を母語とする者を対象者とした研究である。

3. 文献検索のプロセス

医学中央雑誌（Web版）および CiNii（2019/04/30）をデータベースに、選定したキーワードそれぞれと「看護学生」との間で検索を行った。

選択された文献は、1) 看護学生の日本語力に関する研究、2) 看護学生の日本語力向上に関する取り組みに分類することができた。

IV 結果

1. 文献数：9件

検索の結果を表1に示す。医学中央雑誌（Web版）の検索では、対話力、読解力でそれぞれ英語に関する文献が抽出され除外した。CiNiiでは、語彙力、読解力、聴解力の検索でやはり英語に関する文献を除外した。また、日本語力に関するものでは、国家試験の指導に関する文献がヒットしたが個別指導に視点を置いたものであったため除外した。

検索結果を統合したところ、キーワード毎では日本語力4件、国語力3件、作文力0件、対話力1件、語彙力2件、読解力1件、聴解力0件であった（重複あり）。

表 1 本レビューの経過

	CiNii			医中誌web		
	文献数	除外文献	該当文献	文献数	除外文献	該当文献
日本語力	5→4	国家試験個別指導の1文献を除外	23) 24) 28) 29)	1		28)
国語力	2		24) 30)	1		27)
作文力	0			0		
対話力	0			2→1	英語の語彙力1文献を除外	31)
語彙力	3→2	英語の語彙力1文献を除外	24) 25)	0		
読解力	7→1	英語の読解力6文献を除外	26)	7→1	英語の読解力6文献を除外	26)
聴解力	2→0	英語の読解力文献を除外		0		

↓
検索結果 9文献 (レビュー対象)

2. 選択された文献の概要

検索文献の概要を内容により 1) 看護学生の日本語力に関する研究, 2) 看護学生の日本語力向上に向けての取り組みに分類し示す (表 2).

1) 看護学生の日本語力に関する動向

看護学生の日本語力に関する文献は, 5 件で, 2000 年以降の報告であった.

新入生に対して、年度を継続して日本語プレースメントテストを実施した結果, 中学生レベルの語彙力しかない新入生が増加傾向にあることがわかり^{23, 24)}, 同学年の追跡調査の結果からは, 中学生レベルの語彙力のまま卒業を迎える学生がいることも明らかになった²⁵⁾. さらに, 入学から 1 年後は語彙力が伸びるが, 2 年次以降は語彙力が伸びる学生と伸びない学生の差が顕著であることも報告されていた²⁵⁾.

また, 全国の国公立大学学部 1~4 年生で, 大学・学部・学年を無作為抽出し, 協力の得られた回答のうち, 看護学部・学科に所属すると回答した学生の「大学生の学習に対する意欲等に関する調査」を分析したところ, 「読解力」は, 看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルのひとつに抽出されていた. 学生の「読解力」の自己評価は, 学年の上昇につれ高くなっている傾向があったが, 教員が必要と感じている程度には身についていないと報告されていた²⁶⁾.

評価方法としては、日本語プレースメントテスト^{23~25)}や同学の専門科目教員との共同によって作成されたもの²⁶⁾などが用いられていた。回数や調査方法としては、入学時から経過を追って同内容の調査を行う、講義の前後で測定するなどの方法により学生の変化を見ていた。判定は、施行されたテストの得点変化や学生の反応を報告していた。統計処理がなされているものは、1件のみであった²⁶⁾。継続して調査が行われている状況があったが、同一単一施設のものであった^{23~25)}。

一方、看護学専門のテキストについてルビを検討した調査も見られた。専門的な語彙はもちろんであるが、一般的な小学生既習の語句もルビがついている報告であった²⁷⁾。

2) 日本語力向上に向けての取り組みについて

日本語力向上の教授活動に関する報告は4件であった。

初年次教育として日本語に関する講義を開講したところ、専門教育で学ぶ日本語力が連動していることを認識し、学生は専門的な学習に積極的に取り組んでいた²⁸⁾。また、効果的な日本語の学習方法として、e-ラーニングによる手法が報告され、この学習の良さは「いつでも」、「どこでも」自分のペースでできるなどであった。e-ラーニングによる教材学習は、段階を追って学習でき、敬語活用能力の向上に役立ち、看護を学ぶ学生にとって有効であった²⁹⁾。さらに、入学前教育では、漢字・語句、敬語と言葉づかい、文章のルール、文章読解の項目を含む「言葉と文章」の学習を取り入れている報告があった。学生の約8割が「入学後の学習に役立つと思う」と回答していた³⁰⁾。

また、看護の演習科目における日本語力を意識した取り組みもみられ、学生が対話文を作成する授業を行い、学生自身の対話力を意識させることにつながり学生のコミュニケーションに対する自信を高めていた³¹⁾。

表 2 看護学生の日本語力に関する文献検討結果の詳細

No	Keyword	研究題目	対象	方法	結果
1	日本語力	「日本語プレースメントテスト」の実施結果(2008) ²³⁾	2007年度、2008年度の入学の学生	日本語プレースメントテストを施行	2007年度、2008年度に実施した「日本語プレースメント」の結果、「日本語プレースメントテスト」の必要性、国語力低下の問題が示された。
2	日本語力 国語力 語彙力	川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果第2報(2009) ²⁴⁾		日本語プレースメントテストを施行	中学生レベルの語彙力しかない新入生が在籍していることがわかった。
3	看護学生の日本語力 語彙力	川崎医療短期大学における語彙力に関する調査(2010) ²⁵⁾	2007年度生、2008年度生	日本語プレースメントテストを施行	中学生レベルの語彙力そのまま卒業を迎える学生がいる。入学から1年後は語彙力が伸びるが、2年次以降は語彙力が伸びる学生と伸びない学生の差が顕著となる。
4	看護学生の日本語力 読解力	看護系大学において必要とされる教員・資質能力・スキルに関する調査研究(2007) ²⁶⁾	国公立大学で学ぶ3万3千人の学生および同看護学部・学科に所属する教員	アンケート調査	看護学部の教員は、「判断力」「論理的思考力」「探究心」「発想力」「読解力」「結論の導出」等の学力観の資質を必要と感じている。学生は身に付けていないと感じていたが、学生の自己評価では、これらの資質は学年の上昇につれ高くなっている傾向が見られた。
5	看護学生の日本語力 読解力	大学生が使用する小児看護学教科書における漢字ルビに関する実態調査(2014) ²⁷⁾	シラバス記載されて授業に使用されている頻度の高い教科書4種	教科書	ルビ漢字は専門的医学用語に多く見られる。小学校レベルの漢字にもルビがついている。
6	看護学生の日本語力 日本語力	日本語力向上のための初年次教育の実践：日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する「文章表現」の取り組み(2012) ²⁸⁾	入学時のプレースメントテスト結果によって下位に位置づけられた看護科の学生40名	国語のリメディアル教育の効果判定	専門教育やキャリア教育と「文章表現」で学ぶ日本語力が運動していることを認識できた。日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する講義は、有効である。
7	看護学生の日本語力向上に向けての取り組み 日本語力	eラーニングによる日本語力向上の試み—医学部看護学科の実践より—(2017) ²⁹⁾	2016年度、看護学科初年次生59名	作成した日本語eラーニング教材を講義中の「課題」として取り扱ったブレンディッド・ラーニングの成果を到達度テストで把握	看護学科の学生にeラーニングによる日本語(文法・敬語分野)を学習させたところ、その効果を確かめた。
8	看護学生の日本語力向上に向けての取り組み 国語力	“看護学生プレートレーニング”を使用した学習効果の検証(2019) ³⁰⁾	平成30年度の入学者のうち90名	アンケート調査	敬語や言葉遣い、文章を書くルールなど基礎知識として必要な項目を含んだ入学前学習が学習に効果的であった。
9	看護学生の日本語力向上に向けての取り組み 対話力	対話文作成の演習により患者の自己効力感を高めるコミュニケーションの理解を目指した授業の成果(2013) ³¹⁾		援助過程のプロセスに5段階の尺度を設け、授業前後の平均値の差	演習で、対話文の作成を取り入れ、学生自身が自己の対話力を後認識できるように計画。授業後の学生の認識はどの項目においても高かった。

V 考察

1. 看護学生の日本語力について

看護学生における日本語力の報告では、2000年以降に文献が散見し、入学時の基礎学力とその後の経過把握の文献であった。他の分野の文献を見ても日本語力低下の指摘は、2000年以降に漸増している。PISA型調査は、2000年から開始されており義務教育が終了するころの15歳を対象に、「読解力」「数学知識」「科学知識」「問題解決」の4つの能力調査が行われている¹⁹⁾。日本は、当初よい成績を収めていたが、2003年には大幅な成績ダウンが報告されPISAショックとも呼ばれた。このように教育者が、感覚的に捉えていた日本人学生の日本語力低下が調査の施行により数値的に示されたことで、教育界の危機感のもと看護学生においてもこの時期からの報告が散見するようになったのではないかと考える。大学生の日本語力低下が問題視される中、看護学生においても、日本語力の低下が確認され、低レベルで卒業していく学生の存在が示されていた。新井³²⁾は、文章を読んだり書いたりする機会が減少し、語彙力の不足により既知の単語を選択して文章の意味理解に結んでしまう教科書が読めない学生が増えていると述べている。「教科書が読めない」とは、そのまま文字や語句のまとまりとして認識し理解するのではなく、書かれている内容を正確に読解できないことから「読めない」ということに至る。数学の分野でも、問題を解く能力はあっても問題文を正しく読めないために誤った解答をしてしまう者がいるという³²⁾。日本語で学習を進める日本では、日本語の能力は専門学問理解の基盤ともなる。看護学生に関する日本語力の文献が散見していることは、同様のことが懸念されているためと考える。

アメリカでは大学入学年次の重要課題として英語のリーディング、ライティングを取り上げているが、日本では日本語力不足を感じてはいたものの、このような対応策を取ってこなかったと言う⁹⁾。母語である日本語を学習言語として活用し、さらにそれが公用語とでも言うべき母国語として活用できる国は世界でも稀有である。学習言語の能力は、その言語を通じて学ぶ他の学問に影響することも報告されている¹⁷⁾。

看護学生においても日本語力低下の報告があったことから、その後の臨床看護師における状況についても動向をみたところ、看護職の日本語力に関する報告は3件あったが、すべて外国人看護職が対象であった。市川ら³³⁾は、学んだ力を測る項目には「測りやすい力」と「測りにくい力」があると述べている。狭義の知識や技能は測りやすく、読解力、論述力、討論力、批判的思考力、問題解決追求力などは測りにくい力であるとされる。臨床看護師の日本語力についての報告が見あたらないことについては、昨今、様々に存在する日本語力の検定法のような、断片的な日本語の知識を測ることで、看護師の日本語力がある、ないと判断できるものではないということではないかと考える。

言語は、それが適切な形で使えることで意味をなしてくる。日本語力の評価すべき視点は、読むこと、書くこと、話すことだとしても、臨床における日本語の活用では、さらに医療や看護的な視点・表現が加味されることになる。つまり、単に一部のみを見て評価することが難しい。特に看護師は、ある領域に特化すればその領域の語彙は充実し、おのずと語彙力は高くなることが想定される。このように、語彙や文章の理解がそれぞれ、専門的に集約され、トレーニングされていくことから評価方法にも慎重な検討が必要とされることにつながる。このようなことから、臨床看護師を対象とした日本語力の評価研究は見られないのではないかと考える。

今回見出した文献は数も少なく、また限られた施設における報告である。しかし、現実的に卒業時において日本語力の低い学生がいることが報告されながら、その後の経過を示すような研究は見あたらない。日本語力を向上させるような特化した取り組みは、基礎教育以上に臨床現場においては困難なものと考ええる。これらの学生がどのように臨床に適応し、職場に定着していくのか、疑問や懸念の残るところである。また、低い日本語力によって看護師の仕事にはどのような影響があるのか、医療の安全や質の保証などにも明らかにはなっていない。コミュニケーションを苦手とする人が増え、職場適応できず離職していること^{34, 35)}や看護の場面においても、患者と接する事がストレスになっているという報告もある^{36~38)}。また、医療ミスやインシデントにおいても、認

識や受け取りの違いが原因の報告もある^{39, 40)}。病院スタッフにおける読解力の調査結果からは、職種間で能力値に差がある事が述べられていた。これは、スタッフ間で情報が正確に伝わらない可能性を示し「適切に指示をしたにもかかわらず、指示とは異なる処置が悪意なく行われるリスクがある」との考えが示されていた⁴¹⁾。つまり、臨床においては医療者間の十分な意思疎通を妨げることが懸念される。これらの懸念要因と日本語力との関連を含め、今後は、横断的に看護学生の状況を把握し、同時に縦断的な意識をもって状況の把握に努めていくことが必要である。

2. 日本語力向上に向けた取り組みについて

文献からは、高等教育と並行しての日本語力教育の有効性が報告されていた。馬場ら⁹⁾は、日本語も言語の一つであるが、外国語と異なり生活言語としてかなり自由に使いこなせることから、外国語を学ぶように客観的に認識し、学習言語として学ぶ必要性を感じにくいものであると述べている。以前は、母語であれば書けて当たり前、話せて当たり前という考えのもとに、レポートや論文の構成等について説明をする程度であり、大学で改めて日本語を教えようという考えはなかった⁴²⁾。しかし、大学全入時代を迎えた今、日本語力が十分でない学生や自分の日本語に不安を感じ、学びなおしたいと思っている学生がいることも事実だという⁷⁾。初年次教育や入学前教育、e-ラーニングにおける教育の機会を多くの学生が評価していたことは、これを示すものであると考える。高等教育への橋渡し期間の活用や豊富な学習媒体の運用は、今後も十分に検討の余地がある。専門的な学問を学ぶためには、理解するためのスキルがあることが重要である。日本語力の学習が、並行して行われることで専門科目のスキルも向上することになるのではないかと推測する。日本語力向上のためには、客観的に日本語をとらえ、可能な限り実際に日本語に触れ実際の活動を通して、自律的に学び使えるようになることが必要であることが提唱されている。文部科学省¹⁾は、社会生活は、人間と人間との関係によって成立し、その人間関係を成立させるのはコミュニケーションの手段として用いられ

る国語であると述べている。

看護の対象となる様々な生活背景をもつ人々の理解のためにはコミュニケーションが欠かせない。これらのことから、看護職における日本語力については、現状調査の質・量共に高め、対応策の検討につなぐ必要性が示唆された。

VI 結論

わが国における看護学生の日本語力に関する研究は、限られた報告ではあるが他の分野と同様に日本語力の低下があり、卒業時にも低いままの学生の存在も、報告されていた。またこの対策としては、入学前教育、初年次教育として日本語に関する講義や e-ラーニングが有効であった。しかし、不明な部分も多い。今後は、慎重に測定方法を検討し、横断的にデータを集約していくことが必要である。

文献

- 1) 文部科学省 (2016) : 教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チーム (第 3 回) 配付資料 5 言語能力について
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/attach/1366049.htm (2019 年 11 月 30 日閲覧)
- 2) 池田昌明 (1997) : 人間と言語生活 一意識と言語の観点から一, 北陸大学紀要, 第 21 号, p. 317-332
- 3) 岡部恵子 (2011) : 「看護におけるコミュニケーション論」の授業構築と展開—人間理解を基盤にして学ぶコミュニケーション—. 看護展望, 36(7), p22~29
- 4) 文部科学省 (2011 前) : 学制百年史 2 国語施策
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317867.htm (2019 年 11 月 30 日閲覧)
- 5) 文化庁 (2000) : 国語審議会答申 国際社会に対応する日本語の在り方(答申)(抄)平成 12 年 12 月 8 日

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin04/02.html
html (2019年11月30日閲覧)

- 6) 「大学生の学力低下 教員の6割問題視」朝日新聞 2005年11月13日付
- 7) 高松正毅(2006):日本人大学生への日本語教育—日本語変革への構想—, 高崎経済大学論集 第48巻 第3号, p213~222
- 8) 山本裕子(2007):大学生の「書く力」の実態調査—日本語カテストの実施を通して—, 中部大学教育研究 (7), p51-56
- 9) 馬場眞知子, たなかよしこ, 小野博(2011):日本人大学生の日本語力の養成について, リメディアル教育研究 6(1), p3-5
- 10) 下條正純(2009):論述式答案に見る日本人大学生の日本語諸問題, 佐賀大学留学生センター紀要 (9), p47-59
- 11) 日本人の日本語力は今(特集 日本語力に自信がありますか。)月刊日本語 17(1) p4-7, 2004
- 12) 小野博(2004):大学生の学力低下問題と理科教育—日本語カテストの開発と日本人大学生を対象とした日本語学習—, 大学の物理教育 10(2), p81-84
- 13) 大久保昇(2003):日本人の日本語力・漢字力を磨くために国語科指導時間の増加を望む(新春特集 日本の将来を語る)日本教育 (309), p21-23
- 14) 川本信幹(2001):日本語力現状レポート(第16回)日本人の日本語力の上限は, 日本語学 20(2), p122-126
- 15) 川本信幹(2001):日本語力現状レポート(第17回)日本人の日本語力の上限は(2), 日本語学 20(3), p96-100
- 16) 木戸光子(2000):大学における文章表現教育の試み, 筑波大学留学生センター日本語教育論集(15), p73-86
- 17) 馬場眞知子, 田中佳子(2006):学ぶ意欲を育てる日本語力支援教育—その実践で見られた学習動機の志向—, リメディアル教育研究 第1巻第1号, p37-44
- 18) 小野博, 馬場眞知子, たなかよしこ(2012):「概説:国語リメディアル教育と大学生の日本語教育」日本リメディアル教育学会監修『大学における学

- 習支援への挑戦ーリメディアル教育の現状と課題』ナカニシヤ出版，東京
- 19) 文部科学省，国立教育政策研究所(2019):OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2018 年調査国際結果の要約，p6
- 20) Rost. M. (1991): Listening in action . UK: Prentice Hall International Ltd.
- 21) 文部科学省 (2019) : 第 2 これからの時代に求められる国語力 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/003.htm (2019 年 11 月 30 日閲覧)
- 22) 新島出編 (2018) : 広辞苑 第 7 版，岩波書店，東京，p2694
- 23) 橋本美香，山口恒夫，下田健治他(2008) : 「日本語プレースメントテスト」の実施結果，川崎医療短期大学紀要 28，p19-25
- 24) 橋本美香，山口恒夫，兵藤文則他(2009) : 川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果 (第 2 報)，川崎医療短期大学紀要 29 号，p1-5
- 25) 橋本美香，山口恒夫，兵藤文則(2010) : 川崎医療短期大学における語彙力に関する調査，川崎医療短期大学紀要 30 号，p9-15
- 26) 柳井晴夫，石井秀宗 (2007) : 看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究，聖路加看護学会誌 11(1)，p1-9
- 27) 石館美弥子(2014) : 大学生が使用する小児看護学教科書における漢字ルビに関する実態調査，日本看護学会論文集 看護教育 44，p78-81
- 28) 橋本美香，新見明子，黒田裕子 (2012) : 日本語力向上のための初年次教育の実践，日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する「文章表現」の取り組み，川崎医学会誌 一般教養篇(38)，p25-32
- 29) 穂屋下茂，早瀬郁子，長家智子他 (2017) : e-ラーニングによる日本語力向上の試みー医学部看護学科の実践よりー，佐賀大学全学教育機構紀要第 5 号 p89-98
- 30) 釜屋洋子，段ノ上秀雄(2019) : “看護学生プレトレーニング”を使用した学習効果の検証，和洋女子大学紀要 第 60 集，p143-152

- 31) 塩見和子 (2013) : 対話文作成の演習により患者の自己効力感を高めるコミュニケーション法海を目指した授業の成果, インターナショナル Nursing Care Research12 巻 2 号, p141-149
- 32) 新井紀子 “3 教科書が読めないー全国読解力調査” (2018) : AI vs. 教科書が読めない子どもたち. 東京, 東洋経済新報社, p. 168-252
- 33) 市川伸一 : 学力論争から見えてきたもの, 連続シンポジウム「転機の教育」第 2 回「学力・学ぶ意欲・競争ー教育改革の行方」, 2003 年 7 月 5 日 : <http://www.asahi.com/sympo/kyoiku2/03.htm> (2019 年 11 月 30 日閲覧)
- 34) 荒木登茂子 (2013) : 看護師の職場ストレス, 福岡醫學雑誌 104 巻 2 号, p27-33
- 35) 大重育美 (2014) : 新人看護師のコミュニケーションスキルの問題点と P C エゴグラム, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 12 巻, p11-17
- 36) 鈴木英子, 永津麗華, 森田洋一 (2003) : 大学病院に勤務する看護師のバーンアウトとアサーティブな自己表現, 日本保健福祉学会誌 9 (2), p11-18
- 37) 松岡晴香 (2009) : 精神科勤務における看護師の職業性ストレスとその影響, 日本精神保健看護学会誌 18 (1), p1-9.
- 38) 野末聖香 (2019) : 【第 23 回聖路加看護学会学術大会 : 大会長講演】 -心通う看護を支えるコミュニケーション -アサーションがもたらすもの-, 聖路加看護学会誌 Vol.22 No.2
- 39) 嶋森好子, 福留はるみ, 由井尚美他 (2003) : コミュニケーションエラーによる事故事例の収集分析ー看護現場におけるエラー事例の分析からエラー発生要因を探るー2001 年度厚生労働科学研究報告書 (主任研究者 松尾太加志) p32-51
- 40) 鬼塚佳奈子, 高木修 (2003) 医療現場のコミュニケーションエラー ～ コミュニケーションエラーの規定因についての検討～ 日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集
- 41) 岩本宣明 : 衝撃! 「日本語が読めない日本人」は案外いる 東洋経済 ONLINE <https://toyokeizai.net/articles/-/256321?page=6> 2018/12/26 7:00 配

信 (2019年11月30日閲覧)

- 42) 境希里子(2012):日本人学生のための日本語教育 新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目の場合, 文化学園大学紀要. 人文・社会科学研 (20), p107-119

[付記]

本論文の内容の一部は, 第39回日本看護科学学会学術集会において発表した.

A Literature Review on the Japanese Language skills of Japanese Nursing Students

Akemi Suzuki ¹⁾, Chinatsu Mizuno ¹⁾, Keiko Ishiwata²⁾

1) Daito Bunka University,

Faculty of Sports & Health Science, Department of Nursing

2) Nihon Institute of Medical Science University,

Faculty of Health science, Department of Nursing

Abstract

To clarify trends in studies of the Japanese language skills among nursing students whose native language is Japanese, we searched through literature from Ichushi Journal (Web version) and CiNii, without specifying a date for when the documents were published or the type of the study, while setting "Nursing students" and "Japanese language skills" as the keywords. We also added "Native language ability" which has the same meaning as "Japanese language skills", and certain items measured by the Japanese proficiency test which are considered to be components of Japanese proficiency, such as: "skills at writing compositions", "conversational skills", "vocabulary level", "reading comprehension", and "listening comprehension", and searched through the documents. We chose nine documents that fit our purpose from a total of 10 documents, and analyzed them.

For the analysis, we divided the content into the following two categories: the current status of nursing students' Japanese language skills, and their efforts to improve them. Then, we found five documents related to the current state of Japanese language skills and four documents related to the effort to improve them. Although the number of reports on the Japanese language skills of Japanese nursing students was limited, as in other fields, it was pointed out that their Japanese

language skills have declined. As a countermeasure, it was shown that pre-entry education was effective, and for first year education, lectures and e-learning on Japanese language skills were also effective.

Keywords: Nursing Students, Nursing profession,
Japanese language skills, literature review